

中国社会科学院人口研究中心 《中国人口年鉴》 編輯部編

『中国人口年鉴』（1985）

中国社会科学出版社 1986年11月，1302ページ

1978年末の三中全会を経、翌79年夏に馬寅初の名譽回復、一人っ子政策を開始して以降、中国人口問題研究が新段階のスタートをきってから8年近くの時が流れた。この間、日本の約10倍近い人口をもつ中国は、それに匹敵する程の勢いでもって（少なくとも量的には）怒濤のごとくの人人口研究者を生み、拡大蓄積を行ってきた。

本書はまさに、人口研究が長くタブーとなっていた空白期（1960—78年）をうめるがごとく、解放後の中国人口をめぐる変動の歴史を総括的に集大成した画期的な大書（厚さ6cm近く、第一次印刷9000冊）である。

編集にあたったのは、1980年に中国社会科学院の内に新設された人口研究中心（センター）である（87年4月に中心は研究所に格上げされた）。田雪原所長、馬俠、沙吉才副所長以下、総勢力をあげてこの歴史的事業である年鑑編集にたずさわった結果のたまものであり、その努力に敬意を表したい。内容は以下の様な構成をとる。

1. 重要文献…（人口政策と計画出産、婚姻法、戸籍管理、都市と農村区分、労働就業、人口センサスと統計）
2. 総論と各論…（各省市別人口発展）
3. 人口センサスの主要結果
4. 人口統計
5. 計画出産…（出産力調査結果）
6. 調査報告…（死因、人口移動、婚姻家庭）
7. 世界人口との対比…（人口構造、一人あたり経済・生活水準、教育程度と衛生水準）
8. 人口機関・計画出産指導機関・人口学術団体
9. 重要人口著作・論文リスト
10. 中国人口活動大事紀・年譜

重要文献の中には評者が初めて目にする貴重なものが多々入っているし、年譜についてはかねて評者が苦心して作業を行ったこともあるため、中国側から公的にだされた今回の整理に感無量である。ボリュームもたとえば2章だけで433頁にもなる。いずれにせよ解放後の人口政策、人口センサス、歴代人口資料、出産力調査、人口動態分析等々、この一冊があればかなり総括的に中国人口を理解できるという利点は大きい。また海外の利用者のために、巻末に英文目次リストが、さらにはそのみならず、別冊として“English-Chinese Population Data Reference Index” 102頁がつくられ、表を英文でよみとれるという便利さがある。年鑑という名が示すごとく、年一冊のペースで刊行されるときが、今後どのような内容で読刊されるかたのしみである。利用範囲が広いだけにミスプリに充分注意されたい。

なお中国人口の新刊で、以下の2種を補足紹介しておきたい。その第1は、この年鑑と同時平行して、同人口研究所編輯室から、学術研究雑誌『中国人口科学』（Population Science of China）が1987年8月に創刊され双月刊で刊行され初めたことである。第2は、北京经济学院人口経済研究所が編集・データのセンターとなって『中国人口叢書』として30省市が各1分冊として刊行され初めたことである。

従来、海外にいて中国の生研究資料を入手することは内部資料云々の問題があり、なかなか容易ではなかったが、次第にその入手可能量は飛躍拡大しつつある。『人口研究』（中国人民大学人口理論研究所）、『複印報刊資料・人口学』（同）、『人口与経済』（北京经济学院人口経済研究所）等々に加え、各地方レベルの雑誌が爆発している。中でも『西北人口』（蘭州大学西北人口研究所）、『中国少数民族人口』（季刊）は個性的である。『中国老年』『婚姻与家庭』『青年研究』『社会学研究』『社会』『城市問題』『社会学』等人口周辺も噴出している。週刊新聞『中国計画生育報』が87年7月から創刊、中国人口情報中心の『人口動態』『人口文摘』『Population Research』『China Population Newsletter』等も忘れるわけにはいかない。（若林敬子）